

「林業・木を植える人々」

先日ビデオで「木を植えた男」というドイツの映画を見た。妻子を同時に病で亡くした50代の男が、世間を捨て、荒涼とした荒地に入り、羊を飼いながら40年にわたってひとりで木を植えつづける話である。その間第一次世界大戦と第二次世界大戦が勃発したが、彼はそんなことには無頓着でひたすら荒地に木を植えつづける。世間が関知したのはただの2度。第一次大戦のあと、山番が「忽然と現れた森林」を、時の政府に報告。役人や学者が調査に来たが前代未聞の「荒地に自然に出来た森林」に驚き、何かしなくてはと協議したが結局何もしなかった。2度目は第二次世界大戦のとき、「木を植えた男」が1910年以前に一番初めに植えた木を伐採した。

だが、誰一人、「木を植えた男」の存在には気づかなかつた。かれは、長く孤独でいたために言葉も忘れたが、自然のなかで静かに木を植えつづける豊かな暮らしは彼に90歳近くの長寿を与えた。

見終わって、ドイツ人は「木を植えるということ」を深く理解しているのだと思った（注・原作者はフランス人のジャン・ジオノである）。

日本の山村にはこういう「木を植える人々」が数十万人いる。多く見積もれば百万人いる。

古い地方は江戸時代から、中くらは明治、大正、戦前から、新しい地方は戦後から、「木を植える人々」は先祖から引き継いだ「木を植えるという行為」を黙々と続けてきた。世の中が「関知」したことはやはりまれだった。

「木を植える人々」は今もやはり、林業の危機的経営状況に「言葉を失い」かけている。

世間はなかなか気づかない。「役人や学者は協議しているが、結局何もしないかも知れない」。

日本人はそんなに無知な、無教養な民族なのだろうか。そんなことはない。この島には昔から賢人が満ち溢れているのだ。そうでなければ、今の日本史はない。「市井の賢人に満ち溢れた国」。日本とは一言で言えばそういう国だと思う。だから、私はそういう市井の賢人方に向かって林業の危機と救済の必要性を訴えかけている。

自分史における森林と大地。私は、瀬戸内海の山と海の間生まれ育った。友達と山を走り回り、海で魚を追いまわすのが私の遊びだった。

5歳。私は死を「生きたまま土に埋められる夢」として見た。夜中に布団の中で眼を覚まし、泣いた。小学生。山を走り回り、山に「城」を作って遊んだ。木と土が一番大好きだった。ふもとから山を見上げ「白粉ばばあ」が見えたといって友達と騒いだ。おばあさんたちは枯れた松の葉を採りに行くのが日課だった。私達に山と木は親しかった。社会人の若者になった。農林中央金庫に職を得、林業貸出担当となり、故郷の山を調査しつづけた。

50歳。人生の少し苦しい経験もした。山と木に関わりつづけた人生は私に「五体投地」の感覚やドストエフスキーの小説によく出てくる「大地に接吻して、十字を切って、キリストさまにお許しを乞う」感覚を与えていた。仏教徒でもキリスト教徒でもない。だが、私にとって森林と大地は無限に深く優しい。

だから、日本の「木を植える人々」の役に立ちたいと思う。私の単純な研究の視点である。
(秋山孝臣)